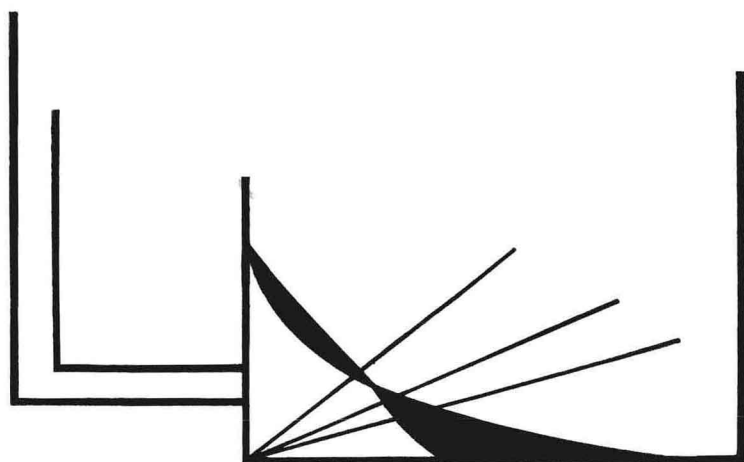


# 三島由紀夫 集

新選 現代日本文學全集

31



筑 摩 書 房 版

三島由紀夫集

昭和三十五年一月十五日 發行

著者 三島由紀夫

發行者 古田晁  
東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 山田一雄  
東京都青梅市根ヶ布三八五

發行所 筑摩書房  
東京都千代田区神田小川町二ノ八

〔電話〕東京二九局(29)七六一(代表)  
振替 東京一六五七六八

製印整 株式會社 印刷版 株式會社 株式會社 株式會社  
本別刷 株式會社 株式會社 株式會社 株式會社  
株式會社 株式會社 株式會社 株式會社  
高陽 株式會社 株式會社 株式會社 株式會社

三島由紀夫集 目次

仮面の告白	五
愛の渴き	七
青の時代	一五
獅子	二六
親切な機械	三六
偉大な姉妹	四五
鍵のかかる部屋	五三
志賀寺上人の恋	九五
水音	一〇二
海と夕焼	一三三
近代能楽集(抄)	
綾の鼓	三八

邯鄲	三六
卒塔婆小町	三四三
葵上	三四九
鹿鳴館	三五五
新ファッシズム論	三六九
自己改造の試み	三九三
現代小説は古典たりうるか	三九六
三島由紀夫について	山本健吉 四三
解説	日野啓三 四七

装幀 恩地孝四郎  
 恩地邦郎

三島由紀夫集



# 反面の告白

## 第一章

美——美といふ奴は恐ろしい、怖かないもんだよ！ つまり、杓子定規に決めることが出来ぬいから、それで恐ろしいのだ。なぜって、神様は人間に謎ばかりかけていらつしやるもんなあ、美の中では両方の岸が一つに出ぶつて、すべての牙磨が一緒に住んでゐるのだ。俺は無教育だけれど、この事はするぶん考へないとも、実に神秘は無限だなあ！ この地球の上では、ずるぶん沢山の謎が人間を苦しめてゐるよ。この謎が解けたら、それは濡れず水の中から出て来るやうなものだ。あゝ美か！ その上俺が理性を持った立派な人間まで、往々聖母の理想を懐いて踏み出しながら、結局悪行の理想をもつて終るといふ事なんだ。いや、まだく恐ろしい事がある。つまり悪行の理想を心に懐いてゐる人間が、同時に聖母の理想をも否定しないで、まるで純潔な青年時代のやうに、真底から美しい理想の憧憬を心に燃やしてゐるのだいや美に人間の心は広い、あまり広過ぎるくらゐだ。俺は出来る事なら少し縮めてみたいよ。えゝ畜生、何が何だか分りやしない、本当に！ 理性の目で汚辱と見えるものが、感情の目には立派な美と見えるんだなあ。一体悪行の中に美があるのかしらん？……

……しかし、人間て奴は自分の痛いことばかり話したがるものだよ。

——ドストエフスキイ「カラマゾフの兄弟」  
第三篇の第三、熱烈なる心の懺悔——詩

永いあひだ、私は自分が生れたときの光景を見たことがあると言ひ張つてゐた。それを言ひ出すたびに大人たちは笑ひ、しまひには自分がかかはれてゐるのかと思つて、この蒼ざめた子供らしくない子供の顔を、かるい憎しみの色さした目つきで眺めた。それがたまたま馴染の浅い客の前で言ひ出されたりすると、白痴と思はれかねないことを心配した祖母は陰のある声でさへぎつて、むかうへ行つて遊んでおいでと言つた。

笑ふ大人は、たいてい何か科学的な説明で説き伏せようとしたのが常だつた。そのとき亦ん坊はまだ目が明いてゐないのだとか、たとひ万一明いてゐたにしても記憶に残るやうなはつきりした観念が得られた筈はないのだとか、子供の心に呑み込めるやうに砕いて説明してやらうと息込むときの多少芝居がかつた熱心さで喋りだすのが定石だつた。ねえさうだらう、とまだ疑ぐり深さうにしてゐる私のちひさな肩をゆすぶつてゐるうちに、彼らは私の企らみに危ふく掛るところだつたと気がつくらしかつた。子供だと思つてゐると油断ができない。こいつ俺を綱にかけて「あのこと」をきき出さうとしてゐるにちがひない、それなら何だつてもつと子供らしく無邪気に訊けないものだらう、「僕どこから生れたの？ 僕どうして生れたの？」と。

彼らは、あらためて、黙つたまま、何のせみか知らずひどく心を傷つけられたしるしの薄ら笑ひをじつとりとうかべたまま、私を見やるのが落ちだつた。

しかし、それは思ひすぎしといふものである。私は「あのこと」などについて何を訊きたいわけでもなかつた。それでなくても大人の心を傷つけることが怖くてならなかつた私に、綱をかけたたりする策略のうかんでくる筈がなかつた。

どう説き聞かされても、また、どう笑ひ去られても、私には自分の生れた光景を見たといふ体験が信じられるばかりだつた。おそらくはその場に居合はせた人が私に話してきかせた記憶からか、私の勝手な空想からか、どちらかだつた。が、私には一箇所だけありありと自分の目で見たとしか思はれないところがあつた。産湯を使はされた盥のふちのところである。下したての爽やかな木肌の盥で、内がはから見えてゐると、ふちのところにはほんのりと光りがさしてゐた。そこどころだけ木肌がまばゆく、黄金でできてゐるやうにみえた。ゆらゆらとそこまですの舌先が舐めるかともみえて届かなかつた。しかしそのふちの下のところの水は、反射のためか、それともそこへも光りがさし入つてゐたのか、なごやかに照り映えて、小さな光る波同士がたえず鉢合はせをしてゐるやうにみえた。

——この記憶にとつて、いちばん有力だと思はれた反駁は、私の生れたのが昼間ではないといふことだつた。午後九時に私は生れたのであ



つた。射してくる日光のあらう管はなかつた。では電燈の光りだつたのか、さうからかはれても、私はいかに夜中だらうとその盥の一箇所にだけは日光が射してゐなかつたでもあるまいと考へる背理のうちへ、さしたる難儀もなく歩み入ることができた。そして盥のゆらめく光りの縁は、何度となく、たしかに私の見た私自身の産湯の時のものとして、記憶のなかに揺曳した。震災の翌々年に私は生れた。

その十年まへ、祖父が植民地の長官時代に起つた疑獄事件で、部下の罪を引受けて職を退いてから（私は美辞麗句を弄してゐるのではない。祖父がもつてゐたやうな、人間に対する愚かな信頼の完璧さは、私の半生でも他に比べられるものを見なかつた。）私の家は殆ど鼻歌まじりと言ひたいほどの気楽な速度で、傾斜の上を迂りだした。莫大な借財、差押、家屋敷の売却、それから窮迫が加はるにつれ暗い衝動のやうにますますもえさかる病的な虚栄。——かうして私が生れたのは、土地柄のあまりよくない町の一角にある古い借家だつた。こけおどかしの鉄の門や前庭や場末の礼拝堂ほどにひろい洋間などのある・坂の上から見ると二階建であり坂の下から見ると三階建の・燻んだ暗い感じのする・何か錯雜した容子の威丈高な家だつた。暗い部屋がたくさんあり、女中が六人ゐた。祖父、祖母、父、母、と都合十人がこの古い簞笥のやうにきしむ家に起き伏してゐた。

祖父の事業慾と祖母の病氣と浪費癖とが一家

の悩みの種だつた。いかがはしい取巻き連のものつてくる絵図面に誘はれて、祖父は黄金夢を夢みながら遠い地方をしばし旅した。古い家柄の出の祖母は、祖父を憎み蔑んでゐた。彼女は猶介不屈な、或る狂ほしい詩的な魂だつた。痼疾の脳神経痛が、遠まはしに、着実に、彼女の神経を蝕んでゐた。同時に無益な明晰さをそれが彼女の理智を増した。死にいたるまでつづいたこの狂燥の発作が、祖父の壮年時代の形見であることを誰が知つてゐたか？

父はこの家で、かよわい美しい花嫁、私の母を迎へた。

大正十四年の一月十四日の朝、陣痛が母を襲つた。夜九時に六五〇匁の小さい赤ん坊が生れた。フランネルの襦袢・クリムいろの羽二重の下着・お召の緋の着物を着せられたお七夜の晩、祖父が一家の前で、奉書の紙に私の名を書き、三方の上ののせ、床の間に置いた。

髪がいつまでたつても金色だつた。オリヅ油をしじゆうつけてゐるうちに黒くなつた。父母は二階に住んでゐた。二階で赤ん坊を育てるのは危険だといふ口実の下に、生れて四十九日目には祖母は母の手から私を奪ひとつた。しじゆう閉て切つた・病氣と老いの匂ひにむせかへる祖母の病室で、その病床に床を並べて私は育てられた。

生れて一年たつたために、私は階段の三段目から落ちて額に傷を負つた。祖母は芝居へ行つてをり、父の従兄妹たちが母ともどもに息

抜きにさわいでゐた。母がふと二階へ物を取りに行つた。その母を追つて行つて、おひきずりの着物の裾がひつかかつて、落ちたのである。歌舞伎座へ呼出しがかけられた。祖母はかへつて来て玄関に立つたまま、右手の杖に体を支えて、出迎へた父をじつと見つめたまま妙に落着いた一字一字を彫りつけるやうな口調で言つた。

「もう死んだのかつ？」

「いいや」

祖母は巫子のやうな確信のある足取りで家へ上つて来た。……

——五歳の元日の朝、赤いコーヒー様のものを私は吐いた。主治医が来て「受けあへぬ」と言つた。カンフルや葡萄糖が針差のやうに打たれた。手首も上膊も脈が触れなくなつて二時間がすぎた。人々は私の死体を見た。

経帷子や遺愛の玩具がそろへられ一族が集まつた。それから一時間ほどして小水が出た。母の兄の博士が、「助かるぞ」と言つた。心臓の働らきかけた証拠だといふのである。ややあつて又小水が出た。徐々に、おぼろげな生命の明るみが私の頬によみがへつた。

その病氣——自家中毒——は私の痼疾になつた。月に一回、あるひは軽いあるひは重いそれが私を訪れた。何度となく危機が見舞つた。私に向つて近づいてくる病氣の発音で、それが死と近しい病氣であるか、それとも死と疎遠な病氣であるかを、私の意識は聴きわけけるやうにな

つた。

最初の記憶、ふしぎな確たる影像で私を思ひ悩ます記憶が、そのあたりではじまつた。

手をひいてくれてゐたのは、母か看護婦か女中かそれとも叔母か、それはわからない。季節も分明でない。午後の日ざしがどんよりとその坂をめぐる家々に射してゐた。私はそのだれか知らぬ女の人に手を引かれ、坂を家の方へのぼつて来た。むかうから下りて来る者があるので、女は私の手を強く引いて道をよけ、立止つた。この影像は何度となく復習され強められ集中され、そのたびごとに新たな意味を附されたものであることはまちがひがない。何故なら、漠とした周囲の情景のなかで、その「坂を下りて来るもの」の姿だけが不当な精密さを帯びてゐるからだ。それもその筈、これこそ私の半生を悩まし脅かしつづけたものの、最初の記念の影像であつたからだ。

坂を下りて来たのは一人の若者だつた。肥桶を前後に荷ひ、汚れた手拭で鉢巻をし、血色のよい美しい頬と輝やく目をもち、足で重みを踏みわけながら坂を下りて来た。それは汚穢屋——糞尿汲取人——であつた。彼は地下足袋を穿き、紺の股引を穿いてゐた。五歳の私は異常な注視でこの姿を見た。まだその意味としては定かではないが、或る力の最初の啓示、或る暗いふしぎな呼び声が私に呼びかけたのであつた。そ

れが汚穢屋の姿に最初に顕現したことは寓喩的である。何故なら糞尿は大地の象徴であるから私に呼びかけたものは根の母の悪意ある愛であつたに相違ないから。

私はこの世にひりつくやうな或る種の欲望があるのを予感した。汚れた若者の姿を見上げながら、『私が彼になりたい』といふ欲求、『私が彼でありたい』といふ欲求が私をしめつけた。その欲求には二つの重点があつたことが、あきらかに思ひ出される。一つの重点は彼の紺の股引であり、一つの重点は彼の職業であつた。紺の股引は彼の下半身を明瞭に輪郭づけてゐた。それはしなやかに動き、私に向つて歩いてくるやうに思はれた。いはん方ない傾倒が、その股引に対して私に起つた。何故だか私にはわからなかつた。

彼の職業——。このとき、物心つくと同時に他の子供たちが陸軍大将になりたいと思ふのと同じ機嫌で、「汚穢屋になりたい」といふ憧れが私に泛んだのであつた。憧れの原因は紺の股引にあつたとも謂はれやうが、そればかりでは決してなかつた。この主題は、それ自身私の中で強められ発展し特異な展開を見せた。

といふのは、彼の職業に対して、私は何か鋭い悲哀、身を擦るやうな悲哀への憧れのやうなものを感じたのである。きはめて感覚的な意味での「悲劇的なもの」を、私は彼の職業から感ずた。彼の職業から、或る「身を挺してゐる」と謂つた感じ、或る投げやりな感じ、或る危険

に対する親近の感じ、虚無と活力とのめざましい混合と謂つた感じ、さういふものが溢れ出て五歳の私に迫り私をとりこにした。汚穢屋といふ職業を私は誤解してゐたのかもしれない。何か別の職業を人から聞いてゐて、彼の服装でそれと誤認し、彼の職業にむりやりにはめ込んでゐたのかもしれない。さうでなければ説明がつかない。

なぜならこの情緒と同じ主題が、やがて、花電車運転手や地下鉄の切符切りの上へ移され、私の知らない・又そこから私が永遠に排除されてゐるやうに思へる「悲劇的な生活」を彼らから強烈に感受させられたからだつた。とりわけ地下鉄の切符切りの場合は、当時地下鉄構内に漂つてゐたゴムのやうな薄荷のやうな匂ひが、彼の青い制服の胸に並んだ金釦と相俟つて、「悲劇的なもの」の聯想を容易に促した。さういふ匂ひの中で生活してゐる人のことを、何故かしら私の心に「悲劇的」に思はせた。私の官能がそれを求めしかも私に拒まれてゐる或る場所で、私に関係なしに行はれる生活や事件、その人々、これらが私の「悲劇的なもの」の定義であり、そこから私が永遠に拒まれてゐるといふ悲哀が、いつも彼ら及び彼らの生活の上に転化され夢みられて、辛うじて私は私自身の悲哀を通して、そこに与らうとしてゐるものらしかつた。

とすれば、私の感じだした「悲劇的なもの」とは、私がそこから拒まれてゐるといふことの

逸早い予感もたらした悲哀の、投影にすぎなかつたのかもしれない。

もう一つの最初の記憶がある。

六つときには読み書きができた。その絵本がよめなかつたとすると、やはり五つの年の記憶に相違ない。

そのころ数ある絵本のなかのただ一冊、しかも見ひらきになつてゐるただ一枚の絵が、しつこく私の偏愛に懇へてゐた。私はそれを見つめてゐると永い退屈な午後を忘れてゐることができ、しかも人がやつて来ると何がなしにうしろめたくてあわてて別のページをあけた。看護婦や女中のお守りが私には煩はしくてならなくなつた。一日その絵に見入つてゐられる生活がしたいと思つた。その頁をあげるときは胸がときめき、他の頁を見てゐても心はそらだつた。

その絵といふのは白馬にまたがつて剣をかざしてゐるジャンヌ・ダルクであつた。馬は鼻孔を怒らし、逞ましい前肢で砂塵を蹴立ててゐた。ジャンヌ・ダルクが身に着けた白銀の鎧には、

何か美しい紋章があつた。彼は美しい顔を顔当から視かせ、凛々しく拔身を青空にふりかざして、「死」へか、ともかく何かしら不吉な力をもつた羽びゆく対象へ立ち向つてゐた。私は彼が次の瞬間に殺されるだらうと信じた。いそいで頁をめくつたら、彼の殺されてゐる絵が見られるかもしれない。絵本の絵は何かの加減でしらない間に「次の瞬間」へ移つてゐることがある

かもしれない。

しかしあるとき看護婦が、何気なしにその絵の頁をひらきながら、横でちらちら盗み見てゐる私に言つた。

「お坊ちやま、この絵のお話御存知？」

「この人男みたいでせう。でも女なんですよ、本当は。女が男のなりをして戦争へ行つてお国のためにつくしたお話ですよ」

「女なの」

私は打ちひしがれた気持だつた。彼だと信じてゐたものが彼女なのであつた。この美しい騎士が男でなくて女だとあつては、何にならう。（現在も私には女の男装への根強い・説明しづらい嫌悪がある。）それはとりわけ彼の死に対して私の抱いた甘い幻想への、残酷な復讐、人生で私が出逢つた最初の「現実からの復讐」に似てゐた。美しい騎士の死の讃美を、後年、私はオスカア・ワイルドの次のやうな詩句に見出した。

藍と藪のなかに殺され横たはる、  
騎士はうつしくし。……

それ以来、私はその絵本を見捨てた。手にとることもしなかつた。

ユイスマンは小説「彼方」のなかで、「やがて極めて巧緻な残酷さと微妙な罪惡に一転すべき性質のものなりし」ジル・ド・レエの神秘主

義的衝動は、シャルル七世の勅によつて彼がその護衛の任に當つたジャンヌ・ダルクのさまじくまな信じ難い事蹟を目のあたり見ることによつて涵養された、と説いてゐる。逆の機縁、つまり嫌悪の機縁として）ではあるが、私の場合も、オルレアン少女が一役買つてゐるのだつた。

——さらに一つの記憶。

汗の匂ひである。汗の匂ひが私を駆り立て、私の憧れをそそり、私を支配した。……

耳をすましてゐると、ザツクザツクといふ混濁した・ごく微かな・おびやかすやうな響きがこえてくる。時として喇叭がまじり・單純な・ふしぎに哀切な歌声が近づく。私は女中の手を引き、はやくはやくと急ぎ立て、女中の腕に抱かれて門のところ立つことへ心をいそがせた。

練兵からかへるさの軍隊が、私の門前をとほるのだつた。私はいつとも子供好きな兵士から、空になつた葉莖をいくつからもらふのをたのしみにしてゐた。祖母が危険だといつてそれを貰ふことを禁じたので、このたのしみには秘密のよるこびが加はつた。鈍重な軍靴のひびきや、汚れた軍服や、肩にかついだ銃器の林は、どの子供をも魅し去るに十分である。しかし私を魅しかれらから葉莖をもらふといふたのしみのかくれた動機をなしてゐるのは、ただかれらの汗の匂ひであつた。

兵士たちの汗の匂ひ、あの潮風のやうな・黄

金に炒られた海岸の空気のやうな匂ひ、あの匂ひが私の鼻孔を搏ち、私を酔はせた。私の最初の匂ひの記憶はこれからかもしれない。その匂ひは、もちろん直ちには性的な快感に結びつくことはなしに、兵士らの運命・彼らの職業の悲劇性・彼らの死・彼らの見るべき遠い国々、さういふものへの官能的な欲求をそれが私のうちに徐々に、そして根強く日ごめさせた。

私が人生ではじめて出逢つたのは、これら異形の幻影だつた。それは実に巧まれた完全さを以て最初から私の前に立つたのだ。何一つ欠けてゐるものもなしに。何一つ、後年の私が自分の意識や行動の源泉をそこに訪ねて、欠けてゐるものもなしに。

私が幼時から人生に対して抱いてゐた観念は、アウグスティヌス風な予定説の線を外れることがたえてなかつた。いくたびとなく無益な迷ひが私を苦しめ、今もなほ苦しめつづけてゐるもの、この迷ひをも一種の墮罪の誘惑と考へれば、私の決定論にゆるぎはなかつた。私の生涯の不安の総計のいはば献立表を、私はまだそれが読めないうちから与へられてゐた。私はただナプキンをかけて食卓に向つてゐればよかつた。今かうした奇矯な書物を書いてゐることすらが、献立表にはちゃんと載せられてをり、最初から私はそれを見てゐた筈であつた。

幼年時代は時間と空間の紛糾した舞台である。たとへば火山の爆發とか叛乱軍の蜂起とか大人

から告げられた諸國のニュースと、目前で起つてゐる祖母の発作や家のなかのこまごました諍ひごとと、今しがたそこへ没入してゐたお伽噺の世界の空想的な事件と、これら三つのものが、いつも私には等価値の、同系列のものに思はれた。私にはこの世界が積木の構築以上に複雑なものと思へず、やがて私がそこへ行かねばならぬいはゆる「社会」が、お伽噺の「世間」以上に陸離たるものと思へなかつた。一つの限定が無意識裡にはじまつてゐた。そしてあらゆる空想は、はじめから、この限定へ立向ふ抵抗の下に、ふしぎに完全な・それ自体一つの熱烈な願ひにも似た絶望を溼ませてゐた。

夜、私は床の中で、私の床の周囲をとりまく闇の延長上に、燦然たる都会が泛ぶのを見た。それは奇妙にひつそりして、しかも光輝と秘密にみちあふれてゐた。そこを訪れた人の面には一つの秘密の刻印が捺されるに相違なかつた。深夜家へ帰つてくる大人たちは、かれらの言葉や举止のうち、どこかしら合言葉めいたもの・フリーメイソンじみたものをこしてゐた。また彼等の顔には、何かきらきらした・直視することの憚られる疲労があつた。触れる指ききに銀粉をのこすあのクリスマスの仮面のやうに、かれらの顔に手を触れれば、夜の都会がかれらを彩る。絵具の色がわかれさうに思はれた。

やがて、私は「夜」が私のすぐ日近で帷をあげるのを見た。それは松旭斎天勝の舞台だつた。(彼女がめづらしく新宿の劇場に出た時だつた

が、同じ劇場で何年かあとに見たダンテといふ奇術師の舞台は、天勝のそれよりも数層倍大がかりなものであつたのに、そのダンテも、また万国博覧会のハイゲンベック・サーカスも、最初天勝ほどに私を愕かしはしなかつた。)

彼女は豊かな肢体を、黙示録の大淫婦めいた衣裳に包んで、舞台の上をのびやかに散歩した。手褌使ひ特有の亡命貴族のやうな勿体ぶつた鷹揚さと、あの一層沈鬱な愛嬌と、あの女丈夫らしい物腰とが、奇妙にも、安物のみが発する思ひ切つた光輝に身を委ねた眞造の衣裳や、女浪曲師のやうな濃厚な化粧や、足の爪先まで塗つた白粉や、人工宝石の堆い瑰麗な腕環などと、或るメラニコリックな調和を示してゐた。むしろ不調和が落す陰鬱の肌理のこまかさ、独特の諧和感をみちびいて来てゐたのだ。)

「天勝になりたい」といふねがひが、「花電車」の運転手になりたい」といふねがひと本質を異にするものであることが、おぼろげながら私にはわかつてゐた。そのもつとも顕著な相違は、前者には、あの「悲劇的なもの」への渴望が全くといつてよいほど欠けてゐたことだ。天勝になりたいたいといふ希みに対しては、私はあの憧れと疾ましきと苛立たしい混淆を味はずにすんだ。それでも動悸を抑へるのに苦しみながら、私はある日母の部屋へ忍び込んで衣裳箆笥をあけたのであつた。

母の着物のなかでいちばんこてこてして、きらびやかな着物が引摺り出された。帯は油絵具

で緋の薨が描かれたものを、土耳其の大官のやうにぐるぐる巻きにした。ちりめんの風呂敷で頭が包まれた。鏡の前に立つてみると、この即興の頭巾の具合は、「宝島」に出てくる海賊の頭巾に似てゐるやうに思はれたので、私は狂ほしい喜びで顔をほてらせた。しかし私の仕事はまだまだ大変だつた。私の一挙一動、私の指先爪先までが、神秘を生むにふさはしいものでなければならなかつた。私は懐中鏡を帯のあひだにはさみ、顔にうすく白粉を塗つた。それから棒状をした銀いろの懐中電燈や、古風な彫金を施した万年筆や、何にまれまぶしく目を射るものをすべて携へた。

かうして私は、まじめくさつて祖母の居間へ押し出した。狂ほしい可笑しさ・うれしさにこらへきれず、

「天勝よ。僕、天勝よ。」

といひながらそこら中を駈けまはつた。

そこには病床の祖母と、母と、誰か来客と、病室づきの女中とがゐた。私の目には誰も見えなかつた。私の執狂は、自分が扮した天勝が多くの目にさらされてゐるといふ意識に集中され、いはばただ私自身をしか見てゐなかつた。しかしふとした加減で、私は母の顔を見た。母はこころもち青ざめて、放心したやうに坐つてゐた。そして私と目が合ふと、その目がすつと伏せられた。

私は了解した。涙が滲んで来た。

何をこのとき私は理解し、あるひは理解を迫

られたのか。「罪に先立つ悔恨」といふ後年の主題が、ここでその端緒を暗示してみせたのか？ それとも愛の目のなかに置かれたときにいかほど孤独がぶざまに見えるかといふ教訓を、私はそこから受けとり、同時にまた、私自身の愛の拒み方を、その裏側から学びとつたのか？

——女中が私を取押へた。私は別の部屋へつれて行かれ、羽毛をむしられる雞のやうに、またたくひまにこの不埒な仮装を剥がされた。

扮装慾は活動写真を見はじめることと昂進した。それは十歳ごろまで顕著につづいた。

あるとき私は書生と「フラ・ディアボロ」といふ音楽映画をみに行つた。ディアボロに扮した役者の、袖口に長いレスをひるがへした宮廷服が忘れられなかつた。僕ああいふの着たいな、あんな鬢がぶつてみたいな、と私が言ふと、書生は軽蔑したやうな笑ひ方をした。そのくせ彼がよく女中部屋で八重垣姫の真似をしてみせて女中たちを笑はせてゐたことを私は知つてゐた。

しかし天勝につづいて私を魅したのはクレオパトラであつた。ある年の暮ちかひ雪の日に、親しい医者が私にせがまれて、その活動写真へ私を連れて行つた。暮のことでお客は少なかつた。医者は手摺に足をのせて眠つてしまつた。

——ひとり私は耽奇の目で眺めてゐた。大ぜいの奴隷に担がれた古怪な聲台に乗つて羅馬へ乗りこむ埃及の女王を。臉全体にアイ・シャドウ

を塗つた沈鬱な目つきを。その着てゐた超自然な衣裳を。それからまた、波斯絨毯のなから現はれたその琥珀いろの半裸の姿を。

私は、今度は祖母や父母の目をぬすんで、(すでに十分な罪の欲びを以て)妹や弟を相手に、クレオパトラの扮装に憂身をやつした。何を私はこの女装から期待したのか？ 後になつて、私は私と同様の期待を、羅馬顔麁期の皇帝、あの羅馬古神の破壊者、あのデカダンの帝王獣、ヘーリオガバルスに見出した。

かうして私は二種類の前提を語り終へた。それは復習を要する。第一の前提は、糞尿汲取人とオルレ안의少女と兵士の汗の匂ひとである。第二の前提は、松旭齋天勝とクレオパトラだ。なほ語られねばならない前提が一つある。

子供に手のとどくかぎりのお伽噺を涉猟しながら、私は女王たちを愛さなかつた。王子だけを愛した。殺される王子たち、死の運命にある王子たちは一層愛した。殺される若者たちを凡て愛した。

しかし私にはまだわからなかつた。何だつて数あるアンデルセン童話のなから、あの「薔薇の妖精」の、恋人が記念にくれた薔薇に接吻してゐるところを大きなナイフで悪党に刺し殺され首を斬られる美しい若者だけが、心に深く影を落すのかを。なぜ多くのワイルドの童話のなかで、「漁夫と人魚」の、人魚を抱き緊めた

まま浜辺に打ち上げられる若い漁夫の亡骸だけが私を魅するのをおか。

勿論、私は他の子供らしいものをも十分に愛した。アンデルセンで好きなのは「夜鶯」であり、また、子供らしい多くの漫画の本を喜んだ。しかしともすると私の心が、死と夜と血潮へむかつてゆくのを、遮げることではできなかった。

執拗に、「殺される王子」の幻影は私を追つた。王子たちのあのタイツを穿いた露はな身装と、彼らの残酷な死とを、結びつけて空想することが、どうしてそのやうに快いのか、誰が私に説き明してくれることができよう。ここに一つのハンガリーの童話がある。原色刷の、きはめて写実的なその挿絵は、永いあひだ私の心を虜にした。

挿絵の王子は、黒のタイツに、その胸には金糸の刺繍を施した薔薇色の上着を着け、紅の裏地をひるがへした濃紺のマントを羽織り、緑と黄金のベルトを腰に巻いてゐた。緑金の兜、真紅の太刀、緑革の矢筒が彼の武装であつた。

その白革の手袋の左手には弓をもち、右手は森の老樹の梢にかけ、凛々しい沈痛な面持で、今しも彼に襲ひかからうと狙つてゐる竜の怖ろしい口を見下ろしてゐた。その面持には、死の決心があつた。もしこの王子が竜退治の勝利者としての運命を荷つてゐるのだとしたら、いかほど私に及ばず蠱惑は薄らいだことであらう。しかし、幸ひなことに、王子は死の運命を荷つてゐるのだつた。

遺憾ながらこの死の運命は十全のものではなかつた。王子は妹を救ひまた美しい妖精の女王と結婚するために、七度の死の試煉に耐へるのだつたが、口に含んだダイヤモンドの魔力のおかげで、七度が七度ともよみがへり、成功の幸福をたのしむに至るのである。右の絵は第一の死——竜に噛み殺される死——の直前の光景だつた。そのち彼は、「大きな蜘蛛につかまれて、毒の汁を体中に刺し込まれて、がつがつ喰はれ」たり、水に溺れて死んだり、火で焼かれたり、蜂や蛇に刺されたりかまれたり、大きな尖つた刀が数しれぬほど一面の切尖を並べてぎつしり植つてゐる穴に身を投じたり、「大雨のやうに」無数に降りかかる大石に打たれて死んだりした。

「竜に噛まれる死」の件りはわけても巨細に、こんな風に書かれてゐた。

「竜はすぐに、がりがりと王子をかみくだきました。王子は小さくかみ切られる間は、痛くて痛くてたまりませんでした。それをじつとこらへて、すつかりきれぎれにされてしまひますら、またふいに、もとの体になつて、ひらりと口の中から飛び出しました。体にはかすれ傷一つついでをりません。竜は、その場へ倒れて死んでしまひました」

私はこの箇所を百遍も読んだ。しかし看過してはならない欠陥だと思はれたのが、「体にはかすれ傷一つついでをりません」といふ一行であつた。この一行を読むと私は作者に裏切られ

たと感じ、作者は重大な過失を犯してゐると考へた。

やがて何かの加減で、私は一つの発明をした。それはここを読むときに、「またふいに」から、「竜は」までを手で隠して読むことだつた。するとこの書物は理想の書物の姿を具現した。それはかう読まれた。……

「竜はすぐに、がりがりと王子をかみくだきました。王子は小さくかみ切られる間は、痛くて痛くてたまりませんでした。それをじつとこらへて、すつかりきれぎれにされてしまひますら、その場へ倒れて死んでしまひました」

——かうしたカットの仕方から、大人たちは背理を読むであらうか？ しかしこの幼ない・傲慢な・おのれの好みに感傷しやすい検閲官は、「すつかりきれぎれにされて」といふ文句と、「その場へ倒れて」といふ文句との、明らかに矛盾はわかまへながら、なほ、そのどちらをも捨てかねたのであつた。

一方また、私は自分が戦死したり殺されたりしてゐる状態を空想することに喜びを持つた。そのくせ、死の恐怖は人一倍つよかつた。女中をいぢめて泣かせたりした明る朝、同じ女中が何事もなかつたやうな明るい笑顔で、朝食の給仕に現はれるのをみると、その笑顔から私はさまざまの意味を読みとつた。それは十分な勝算から来る悪魔的な微笑としか思はれなかつた。彼女は私への復讐に、おそらく毒殺の企らみを

したのであらう。私の胸は恐怖に波立つた。きつと毒は、おみおつけに入れたに相違なかつた。さう思はれる朝には、決しておみおつけに手をつけなかつた。そして食事をするまで座を立ちざま、「それみたことか」と謂はんばかりに、女中の顔を見つめてやるのが幾度かあつた。女は食卓のむかうで、毒殺の企図が破れた落胆に立ちもやらず、冷めてはて、いくつかの埃さへ浮いてゐる味噌汁を、残り多げに見つめてゐるやうに思はれた。

祖母が私の病弱をいたはるために、また、私に近所の男の子たちと遊ぶことを禁じたので、私の遊び相手は女中や看護婦を除けば、祖母が近所の女の子のうちから私のために選んでくれた三人の女の子だけだつた。ちよつとした騒音、戸のはげしい開け閉めで、おもちやの喇叭、角力、あらゆる際立つた音や響きは、祖母の右膝の神経痛に障るので、私たちの遊びは女の子が普通にする以上に物静かなものでなければならなかつた。私はむしろ、一人で本を読むことだの、積木をすることだの、恣しに空想に耽ることだの、絵を描くことだのの方を、はるかに愛した。そののち妹や弟が生れると、かれらは父の配慮で、(私のやうに祖母の手には委ねられず)子供らしく自由に育てられてゐたが、私はいかにも自由や乱暴を、さして羨ましく思ふでもなかつた。

しかし従妹の家などへ遊びにゆくと事情はか

はつた。私でさへが、一人の「男の子」であることを要求された。或る従妹——杉子としておかう——の家で、私が七歳の早春、もう小学校入学が間近といふころにそこを訪れたとき、記念すべき事件が起つた。といふのは私を連れて行つた祖母が、私を「大きくなつた、大きくなつた」とほめそやす大伯母たちのおだてに乗つて、そこで出された私の食事に、特別の例外を許したのであつた。前にも述べた自家中毒の頻発におびえて、その年まで祖母は私に「青い肌のお魚」を禁じてゐた。それまで私は魚といへば、平目や鰈や鯛のやうな自身の魚しか知らず、馬鈴薯といへば、つぶして裏漉しにかけたものしか知らず、菓子といへば、餡物は禁じられ、軽いビスケットやウエファースや干菓子ばかりで、果物などは、薄く切つた林檎や少量の蜜柑だけしか知らなかつた。はじめてたべる青いお魚——それは鱈だつた——を、私は非常に満悦して喰べた。その美味は私に大人の資格がまつ一つ与へられたことを意味してゐたが、いつもそれを感じるたびに居心地のわるさをおぼえる一つの不安——「大人になることの不安」——の重みをも、やや苦く私の舌先に味はせずには措かなかつた。

杉子は健康で、生命にみちあふれた子供だつた。その家へ泊つて、一つ部屋に床を並べて寝るときなど、頭を枕に落すと同時に、まるで機械のやうに簡単に眠りに落ちる杉子を、いつまでも眠れない私は、軽い嫉ましさで嘆賞を以て

見成みつた。彼女の家では、私は自分の家にあるよりも、数層倍自由であつた。私を奪ひ去るであらう仮想敵——つまり私の父母——がここにはゐないので、祖母は安心して私を自由にしておいた。家にあるときのやうに、私をいつも目の届く範圍以内につかまへておく必要もなかつた。

ところが、さうされた私は、それほど自由を享樂することはできなかつた。私は病後をはじめ歩きだした病人のやうに、見えない義務を強ひられてゐるやうな窮屈さを感じた。むしろ意惰な寢床が恋しかつた。そしてここでは、私は一人の男の子であることを、言はず語らずのうちには要求されてゐた。心に染まぬ演技がはじまつた。人の目に私の演技と映るものが私にとつては本質に還らうといふ要求の表はれであり、人の目に自然な私と映るものこそ私の演技であるといふメカニズムを、このころからおぼろげに私は理解しはじめてゐた。

その本意ない演技が私をして、「戦争ごつこをししようよ」と言はせるのであつた。杉子ともう一人の従妹と、女二人が私の相手だつたので、戦争ごつこはふさはしい遊びではなかつた。まして相手のアマゾーネンアマゾーネンは気象薄の体だつた。私が戦争ごつこを提唱したのも、逆の御義理、つまり彼女たちにおもねらず彼女たちを多少困らせてやらねばならぬといふ逆の御義理からであつた。

薄暮の家の内外うちととで私たちはお互ひに退屈しな



がら不器用な戦争ごっこをつづけた。繁みのかげから杉子がタンタンと機関銃の音を口で真似たりした。こちらで結論をつけねばならぬと私は思った。そして家の中へ逃げて入つて、タンタンと連呼しながら追ひかけてくる女兵を見ると、胸のあたりを押へて座敷のまんなかにくつたりと倒れた。

「どうしたの、公ちゃん」

——女兵たちが真顔で寄つて来た。目もひらかず手も動かさずに私は答へた。

「僕戦死してるんだつてば」

私はねぢれた恰好をして倒れてゐる自分の姿を想像することに喜びをおぼえた。自分が撃たれて死んでゆくといふ状態にえもいはれぬ快さがあった。たとひ本当に彈丸が中つても、私なら痛くはあるまいと思はれた。……

幼年時。……

私はその一つの象徴のやうな情景につきあつた。その情景は、今の私には、幼年時そのものと思はれる。それを見たとき、幼年時代が私から立去つてゆかうとする訣別の手を私は感じた。私の内的な時間が悉く私の内側から立ち昇り、この一枚の絵の前で堰き止められ、絵の中の人物と動きと音とを正確に模倣し、その模写が完成すると同時に原画であつた光景は時の中へ融け去り、私に遺されるものとは、唯一の模写——いはばまた、私の幼年時の正確な複製——にすぎぬであらうことを、私は予感した。誰の

幼年時にもこのやうな事件は一つ宛用意されてゐる筈だ。ただそれが、えてして事件ともいへぬやうなささやかな形をとりがちなので、気づかれないで過ぎてしまふほうが多いだけだ。

——その光景はかうだつた。

あるとき夏祭の団が私の家の門から雪崩れこんだのである。

祖母は仕事師を手なづけてゐて、足のわるい自分のために、また孫の私のために、町内の祭の行列が門前の道をとほるやうに計つてもらつた。本来ここは祭の道順ではなかつたが、仕事師の頭の手配で行列は毎年多少の迂路を敢てしながら、私の家の前をとほるのが習はしになつた。

私は家の者たちと門の前に立つてゐた。唐草模様の鉄門は左右に開け放たれ、前の磔にはきよらかに水が打たれてゐた。太鼓の音が、濺みがちに近づいてゐた。

次第に歌詞も粒立つてきこえてくる木遣の悲調が、無秩序な祭のざわめきを貫いて、この見かけの空さわざの、まことの主題ともいふべきものを告げ知らすのだつた。それは人間と永遠とのきはめて卑俗な交易会、或る敬虔な乱倫によつてしか成就されない交易会の悲しみを、懸へてゐるやうに思はれた。解けがたくもつれあつた音の集団は、いつしか前駆の錫杖の金属音、太鼓の濺んだとどろき、神輿のかつぎ手の雑多な掛声などに分かち聞かれた。私の胸は、(そのころから激しい期待は喜びといふよりはむしろ苦

しみであつたが)、ほとんど立つてゐられないほど息苦しく高鳴つた。錫杖をもつた神官は狐の面をかぶつてゐた。この神秘的な獣の金いろの目が、私をじつと魅するやうに見詰めてすぎる、といつか私は傍らの家人の裾につかまつて、目前の行列が私に与へる恐怖に近い歎びから、折あらば逃げ出さうと構へてゐる自分を感じた。私の人生に立向ふ態度はこのころからかうだつた。あまりに待たれたものから、あまりに事前の空想で修飾されすぎたものからは、どのつまりは逃げ出すほかに手がないのだつた。

やがて仕丁がかついで・七五三繩を張つた賽銭箱がとほりすぎ、子供の神輿が軽佻に跳ねまはりながら行きすぎると、黒と黄金の荘嚴な大神輿が近づいた。それはすでに遠くから、頂きの金の鳳凰がかなたこなたに漂ふ波間の鳥のやうに、どよめきにつれて眩ゆく動くさまを見ることで、一種きらびやかな不安を私たちに与へてゐた。その神輿のまはりには、熱帯の空気のやうな蒸々しい無風状態が舞いてゐた。それは悪意のある怠惰で、若者たちの裸の肩の上に、熱つぼく揺られてゐるやうに見えた。紅白の太繩、黒塗りに黄金の欄干、そのみしと閉ざされた金泥の扉のうちには、まつくらな四尺平方の闇があつて、雲一つない初夏の昼日中に、このたえず上下左右に揺らめく跳躍してゐる真四角な空つぼな夜が、公然と君臨してゐるのだつた。

神輿は私たちの眼前に來た。そろひの浴衣も



あらかた肌をさらしてゐる若衆たちが、神輿自身が酔ひしれてゐるやうな動きで、練りに練つた。かれらの足はもつれ、かれらの目は地上のものを見てゐるとも思はれなかつた。大きな団扇をもつた若者が、一トきは高い叫びで一群の周囲を駆けめぐりながら、けしかけてゐた。神輿は時あつて、ぐらぐらと傾いた。するとまた狂ほしい掛声が立て直した。

この時、何らかの力の働らかうとする意志が、一見今までどほりに練りまはしてゐるとみえるこの一団から、私の家の大人たちに直感されたものかどうか、突然、私は私がつかまつてゐた大人の手でうしろの方へ押しやられた。「危ない！」と誰かが叫んだ。それからあとは何のこともやらわからなかつた。私は手を引かれて前庭を駆けて逃げた。そして内玄関から家の中へとびこんだ。

私は誰やらと二階へ駆上つた。露台へ出て、今しも前庭へ雪崩れ込んで来るあの黒い神輿の一団を、息をこらして見た。

何の力が、かれらをこのやうな衝動に駆つたのか、のちのちまでも私は考へた。それはわからない。あの数十人の若者が、何にせよ計画的に、私の門内へ雪崩れ込めようと思つたりするかどうか、どうしてでしよう。

植込が小気味よく踏み躪られた。本当のお祭だつた。私に飽かれつくしてゐた前庭が、別世界に変わったのであつた。神輿は限なくそこを練り廻され、灌木はめりめりと裂けて踏まれた。

何が起つてゐるのかさへ、私には弁へがたかつた。音が中和され合つて、まるでそこには凍結した沈黙と、意味のない轟音とが、交る交る訪れて来てゐるやうに思はれた。色もそのやうに、金や朱や紫や緑や黄や紺や白が躍動して湧き立ち、あるときは金が、あるときは朱が、そこ全体を支配してゐる一ト色のやうに思はれた。

が、唯一つ鮮やかなものが、私を目覚かせ、切なくさせ、私の心を放しらぬ苦しみを以て充たした。それは神輿の担ぎ手たちの、世にも淫らな・あからさまな陶醉の表情だつた。……

## 第二章

すでにここ一年あまり、私は奇態な玩具をあてがはれた子供の悩みを悩んでゐた。十三歳であつた。

その玩具は折あるごとに容積を増し、使ひやうによつては随分面白い玩具であることをほめかすのであつた。ところがそのどこにも使用法が書いてなかつたので、玩具のはうで私と遊びたがりはじめると、私は戸惑ひを余儀なくされた。この屈辱と焦燥が、時には募つて玩具を傷つけてやりたいとまで思はせることがあつた。

しかし結局、甘やかな秘密をしらせ顔の不逞な玩具に私のはうから屈服し・そのなるがままの姿を無為に眺めてゐる他はなかつた。

そこで私はもつと虚心に玩具の嚮ふところに耳を傾けようといふ氣になつた。さう思つて見

てゐると、この玩具にはすでに一定の確たる嗜好・いはば秩序、が備はつてゐた。嗜好の系列は幼年時の記憶に搦て加へて、夏の海で見た裸体の青年だの、神宮外苑のプールで見た水泳の選手だの、従姉と結婚した色の浅黒い青年だの、多くの冒険小説の勇敢な主人公だのに、それからそれへと繋がつてゐた。今まではそれらの系列を、ほかの詩的な系列とごつちやにしてゐたのであつた。

玩具もやはり死と血潮と固い肉体へむかつて頭をもたげた。書生が持つてゐて・ひそかに彼から貸してもらふ講談雑誌の口絵に見られる血みどろな決闘の場面や、腹を切つてゐる若侍の絵や、弾丸を受けて歯を喰ひしりばり・軍服の胸をつかんだ手のあひだから血を滴らせてゐる兵卒の絵や、小結程度のあまり肥つてゐない堅肉の力士の写真や、……さうしたのを見ると玩具は、すぐさま好奇の頭をもたげた。「好奇の」といふ形容詞が妥当を欠くなら、「愛の」と言ひかへても、「欲求の」と言ひかへてもよい。

私の快感はこれらのことがわかるにつれ、徐徐に意識的に計画的に動きだした。選択が行はれ、整理が行はれるにいたつた。講談雑誌の口絵の構図が不十分であると思へば、色鉛筆でまづ模写をして、それをもとに十分な修正をほどこした。それは胸にうけた銃創を抱いてびびまづいてゐるサカサの青年や、墜落し頭蓋を割られて・顔の半ばを血にひたして倒れてゐる綱渡り師などの絵であつたが、学校にゐるあひ